

五月感泣集

池

さつきすぐ側に立つてみた時には
水面いつばいにさざ波がしづかにひろがつてみた
かうして塔の上から眺めわたしてゐると
蓮の小さい葉とからみあつてゐる根とが乱れてしづんでゐる
池の中にはつぼみの点在してゐるのも透かして見える
やがて来る夏のすさまじいひろがり
僕とお前の上にもしあわせが来るといふ予感がする

窓

窓の所のガラスの金魚鉢には日が射しこんでゐる
朱色に大きく水がゆらぐ時がある
僕の飼つてゐた金魚は何十年か前に死んだのだが
現在も僕の心の中で朱色に大きくゆらぐ

窓の所の鳥籠には日がさしこみ
鵬鵠が止まり木で羽づくろひしてゐる
僕の飼つてゐた鵬鵠は何十年か前に死んだのだが
現在も僕の心の中のそれは羽を動かす
僕はつぶやく
オタケサン

噴水

噴水の設計者は花火師と似てゐる
黒い服を着て
黙考し徘徊をくりかへす
時来たつて仕掛けを組み立てる
計算通り行くかどうか
しづかにその方に目をむけ空を見上げる

花火師は黒いひろい夜空を見上げるのだが
噴水設計者の場合は明るい木立の梢を見上げる
噴出した太い白い水流の頂点で
ほぼ永遠に緑色の大きい玉をころがせて見せるといふことである

おくりもの

お前のくれたライター
手のひらの中で身動きもしない白い小鳥
頭をなでると軽くくちばしをあけた
何度かくりかへしてみても
煙草の先端に向つてくちばしをあけるだけ
そのたびに僕はいらつく
最後には　しやがれた声で言ふ
愛がにせものヨ
アナタハウソツキ

お前のくれたライター
手のひらの中で身動きしようとしてゐる赤い小鳥
頭をなでるとくちばしから炎
それを煙草に受けて僕は吸つた
いつばいに煙を吹きかける
するとしづかに目をつぶつてゐる
霧の中の枯木の枝に止つてゐる

池

さつきすぐ側に立つてみた時には
大きくゆれる蓮の葉とこすれあふ葉柄の音がすさまじかつた
かうして塔の上から眺めわたしてゐると
月の光をあびた無数の露がこぼれ
乱れてゆらいで飛んでゐる
池も水も波立つて　輝いて
花と葉にするどい刃をたててゐる
やがて来る冬には

すべてを池の中に朽ちさせてしまふであらう
朽ち落ちるのが予感出来る
折れて沈んでひつそりとまた沈むであらう
その時にも僕とお前は心を寄せあつてゐよう